
哀とコナン

音符

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀とコナン

【Nコード】

N9886E

【作者名】

音符

【あらすじ】

哀とコナンはお互いの事を好きだが、その気持ちに気付けないでいた。そして哀が・・・

(前書き)

コ哀です。苦手な方はB a c kしてください。

夏の暑い日、少年探偵団はいつものようにそろって登校していた。

けど、いつもと違うところが1つある。

哀がコナンの方を、コナンが哀の方をちらちら見ているのだ。

それに気付いた歩美が

「哀ちゃん、放課後話したい事があるんだけど・・・いい??」
と声をかけた。

「別にいいわよ」

「ありがとう。じゃあ放課後ね!」

学校が終わり、哀と歩美は喫茶店に居た。

「哀ちゃんさあ・・・コナン君の事好きでしょ」

「なっ・・・!!なんで私が江戸川君の事を・・・／／／」

哀は凶星を言われて焦って言った。「だって哀ちゃんコナン君の事
ちらちら見てるんだもん。・・・ねえ、歩美にはほんとの事言っ
て歩美・・・哀ちゃんの力になりたいの!!」

「吉田さん・・・分かったわ。私・・・江戸川の事が好きなの・・・」

哀は自分の親友である歩美にすべてを話した。

「そっか。ありがとね哀ちゃん!ほんとのこと話してくれて。それ
に・・・コナン君も哀ちゃんの事好きみたいだよ?コナン君も哀
ちゃんの事ちらちら見てたもん!」

歩美の言葉に哀は驚いた。

「えっ！？それほんと？」

「うん！この際思い切って告白しちゃえば？」

「え……でも……」

哀は少し迷ったが、コナンに告白することに決めて、歩美と別れた。

（工藤君に告白かぁ……今度の日曜日にデートにでも誘おうかしら）

哀はそんな事を考えながら眠りについた。

翌日の帰り道。

「あの、工藤君……今度の日曜日暇かしら」

「ああ・別に暇だけど」

「2人でどこか出掛けない？」

「ああ、いいぜ」

「ありがと。じゃあ日曜日の朝向かえに行くわ」

「わかった。楽しみに待ってるぜ」

彼はそう言って笑顔を見せた。

ドキン……

哀の鼓動が高まる。気付いた時には哀はコナンを抱きしめていた。

「／／はい……ばら……？」

「工藤君……私、貴方のことが好……っ！！！」

途中で哀の言葉が途切れた。いや、声が出せる状況ではなくなったのだ。

その原因は、コナンが哀の唇を塞いだから……

「……っ工藤君……？」

「灰原……いや哀、俺もお前の事が好きだ！！大好……っ」

コナンが言い終わる前に哀はコナンの唇を塞いでいた。

「……っ哀……俺と付き合ってくれるか？」

「もちろん。喜んで」

そう言って哀はコナンに微笑んで見せた。

こうして2人は恋人同士になった。

○。○。○。○。○。

日曜日になり、哀はコナンを迎えに探偵事務所に向かった。

ピンポーン

「はい。あ、哀ちゃん。コナン君でしょ？ちょっと待っててね」

蘭が出て来てそう言ってしばらくしてコナンが来た。

「わりい、待たしちまって」

「いいわよ。そのかわり後で——」

哀はコナンの耳元で何か囁いた。

それを聞いたコナンの顔は真っ赤になっていた。

「／／／わあったよ／／／」

2人はトロピカルランドに来た。

「哀、どれから乗るか？」

コナンはいつもよりそわそわしている。

「クスッ……貴方って以外に子供っぽいのね」

哀が笑いながら言った。

「んだよ……わりいか」

「別に……そんな貴方に惚れたんだしね」

「／／／てかまじでどれから乗るんだよ」

「貴方と一緒になら何でもいいわ」

「じゃあジェットコースターからな」

そう言ってコナンは哀の手を引っ張り、ジェットコースター乗り場まで走り列に並んだ。30分位待ってジェットコースターに乗った。

その後コナンと哀はお化け屋敷に入った。

”ばあゝっ”

「きゃっ!!」

哀はびっくりしてコナンの腕に抱き着いた。

「／／／／／哀・・・」

「／／／あつごめんなさい。」

哀はそう言ってコナンの腕を離そうとしたが、コナンが自分の腕を哀の腕に絡めてきたのでそのままお化け屋敷から出た。

コナン達はお昼ご飯を食べる事にし、レストランで食事をしていた。

「・・・哀、はい・・・」

コナンはそう言って自分のスプーンを差し出した。

「えっ・・・？」

「ほら、早くあゝんしろよ。落ちるぞ」

「／／／／／」

それでも哀は食べようとしなない。次の瞬間コナンは哀のスプーンを使ってご飯を食べた。

「ちよっ!! 工藤君っ!!!!／／／／／」

「／／／／／いいだろ。だからお前も食べろ!!」

またコナンは自分のスプーンを差し出す。

「／／／／／あ・・・あゝん・・・／／／／／」

哀はやっとコナンのご飯を食べた。

「よしっ!! いい子だ哀。ありがとな」

コナンは嬉しそうに哀をほめた。

ご飯を食べ終わった2人は、最後に観覧車に乗ることにした。

「あっ・・・あのっ江戸川君・・・」

「コナンでいいよ」

「えっ／＼／＼コ・・・コナン・・・」

「何だ？哀」

「／＼／・・・朝私が言った事覚えてる？」

「／＼／／／あ、ああ。もちろん覚えてるぜ」

そう言ってコナンは哀にキスをした。朝哀がコナンに言ったのはこの事だったのだ。

「・・・ん・・・ん・・・」

コナンが唇を離すと、哀は頬を赤くして

「／＼／コナンっ・・・もっとキスして。もっと深いやつ・・・／＼」

「・・・ああ、いいぜ。けどもう観覧車が下に着いちまうから、家に帰ったらな／＼／」

〇。〇。〇。〇。〇。

夕方、哀の家についた。

「・・・コナン」

「ああ、わかってる／＼／／」

コナンは哀を抱き寄せると、深く口付けた。

「・・・んっ・・・ん・・・ん・・・」

哀が声を漏らすと、コナンは更に深く口付け、哀の舌に自分の舌を絡めつけた。

「・・・ん・・・ん・・・んうっ・・・ふっ・・・」

コナンが哀の舌と唇を解放したとき、哀はソファアに座りこんだ。

「大丈夫か、哀？ごめんな・・・俺、やり過ぎちまって」

「／＼／・・・そんな事ないわ。・・・とても気持ち良かったもの」

「哀・・・ありがとな」

「どういたしまして」

2はそう言って微笑んだ。

○。○。○。○。○。

それから10年後、哀とコナンは結婚して幸せに暮らした・・・。

—END—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9886e/>

哀とコナン

2011年4月15日05時34分発行